九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アジアを知りたい : 九州大学発アジアへのアプローチ

https://doi.org/10.15017/13306

出版情報：2006-03-20. 九州大学アジア総合政策センター
バージョン：
権利関係：

緒方 一夫
九州大学熱帯農学研究センター教授。アジア総合政策センター協力教員。熱帯アジアの農学や昆虫学が研究テーマ。国際協力事業団の専門家としてバングラデシュやベトナムで活躍する一方、専門のアリ類の系統生物地理の研究をベトナム、タイ、インドネシア、マレーシアなどで行う。

岡崎 智己
九州大学留学生センター教授。アジア総合政策センター長。専門は日本語教育。日本語母語話者教師と非母語話者教師の連携について、中国や香港、タイで調査を行う。アジア総合政策センターの前身であるアジア総合研究センターの時代から、センターの運営に関わる。

ピニングトン ノエル ジョン
九州大学アジア総合政策センター教授。専門は日本文学と日本思想。古代インドのサンスクリット文献や中国唐代の詩の研究を経て、日本の古典文学と思想に研究対象が移る。近年は能（世阿弥）の研究から「道」という概念が考察の中心。

アジアへのアプローチ

司　会

・**岡崎 智己氏**（九州大学アジア総合政策センター長）

参加者

・**柳原 正治氏**（九州大学理事・副学長）
・**洪　潤植氏**
（東国大学校名誉教授・同大学校日本学研究所所長）
・**緒方 一夫氏**（九州大学熱帯農学研究センター副センター長）
・**ピニングトン ノエル ジョン氏**
（九州大学アジア総合政策センター教授）

柳原 正治
九州大学理事・副学長として九州大学の学術、学生交流を含む国際交流全般を統括、担当。国際法が専門で、ここ数年は「東アジアにおける近代ヨーロッパ国際法の受容過程の比較研究」というテーマで日中韓の共同研究を行う。

洪　潤植
東国大学校名誉教授・同大学校日本学研究所所長。専門は韓国史で、文化財を中心に研究。龍谷大学、仏教大学、大正大学などでも教鞭をとり、九州大学特任教授。韓国伝統芸術学会会長、韓国国楽芸術高等学校校長を歴任。

アジアとの共生のための方法論

岡崎　本学のホームページ[※1]で総長が述べておられますように、九州大学は「教育」「研究」「社会貢献」「国際貢献」を活動の4本の柱とし、「新科学領域への展開」と「アジア指向」を将来に向けた基本的方向性として定めているわけですが、この九大の「アジア指向」につきまして、まず洪先生にお伺いしたく思います。洪先生は韓国で長く日本を研究してこられ、現在は特任教授として本学のご意見番も務めていただいているわけですが、洪先生からご覧になって、九大の「アジア指向」はどういった方向、内容を持つべきだとお考えになりますか。

洪　私は以前から九州大学は、東アジアにおける文化の交差路とも言うべき福岡の地にあって、東アジアの文化・学術交流の要になるべき大学であると考えています。今後アジアは東アジアの日中韓という三国が中心になって、いろいろなことが進んでいくのではないかと思います。現在の韓国と日本の関係は政治的にあまり良くないですね。歴史問題は両国の間柄を悪化させましたが、政治家が言っていることと研究者たちが考えていることは違うと思います。良くない関係をどのようにしたら良くすることができるのかという「融和」と「共生」のための方法論を考える必要があると思います。アジア重視を謳う九州大学から、是非そうした議論を起こしてほしいと思いますね。

柳原　現在、韓国を研究する時、あるいは日本や中国を研究する時に、その国一国だけを見ていたら、とてもわからないので、狭い意味での東アジアの歴史を見た時に、日中韓の三つを比較して検討していくということは、非常に重要ですね。日本の文部科学省も政策として掲げていますが、私は日中韓のパートナーシップは非常に重要なことだと思っています。九州大学のアジア研究も、当然のことながらそうした方向で推進していくべきでしょうね。

岡崎　緒方先生はアジアでの国際協力プロジェクトにも数多く関わられてこられたわけですが、そうした国際協力の現場では「共生」あるいは「パートナーシップ」というのはどのようにとらえられているのでしょうか。

緒方　まず大前提として、私たちが暮らしている地域が安定し、そして発展していくというのが一番望ましい状態だということがありますね。私が関わってきた国際協力プロジェクトは、知識や技術を与えるという考えではなく、同じ地域のメンバーが助け合うということを大切にしています。国際協力の精神は、「情けは人のためならず」というところがあると思います。つまり「まわりまわって自分に返る」というところが重要だと思います。実際、私たちが現場で技術移転や指導をする場合、教えることによって教えられるということが非常に多いと感じています。

岡崎　緒方先生たちが関わっておられる国際協力プロジェクトでは「共生」の精神が発揮されているというわけですね。ところで「共生」ということでは、すでにEUという形で統合を遂げたと言いますか、実際にはまだ進行形なのでしょうが、ヨーロッパがアジアの一歩先を行く先輩のように思えますが、そうしたヨーロッパの視点から見た時、アジアはどのように映るのでしょうか。

ピニングトン　ヨーロッパの国々の間には長い歴史の中で形成された多くの文化的共通項が見られますが、しかし、同時にこれは争いの原因でもありました。アジアの国々も同様にある意味での文化的な共通項というのを持っているように思います。

　ところで、ヨーロッパを統一に導いた最大の要因は、ナショナリズムによって生じた第二次世界大戦の反省を踏まえて、もう戦争はこりごりだ、戦争を回避するにはどうしたらいいのかということを一所懸命考えたことにあります。そのため、様々な仕組みを作り経済統合を図ってきたわけです。これは今のアジアにも当てはまることではないでしょうか。ナショナリズムから生

じる様々な問題をなんとかして乗り越え、経済の統合を図り、情報を共有化していく作業を進めていくべきでしょう。

興味深いのは、統一を達成し、戦争を回避するシステムを作った、あるいは作りつつある現在のヨーロッパには絶望感や悲観的な気分が広がっているということです。20世紀の私たちの夢は、貧困がなくなり、教育レベルも高くなり、社会全体が発展してみんなが幸せになるというものでしたが、実際には貧困、高齢化、犯罪などの問題は深刻で、いまでは解決不可能にすら思われます。しかし、アジアには楽観主義が広がっています。韓国や中国の若い人たちは「未来は明るい」と感じています。ヨーロッパは古い考え方にとらわれていますが、アジアはヨーロッパが見出せなかったような解決策を見出すのではないかと私はひそかに期待しています。

フィリピン、アテネオ・デ・マニラ大学のキャンパス

柳原　大変心強い励ましの言葉をいただいたように思います。しかし、一方でアジア=多様性と言われる混沌とした面が存在することも確かです。現段階では国毎に政治体制も異なり、経済的な格差も極めて大きいので、果たしてアジアに共同体のようなものをつくれるのかというのはなかなか難しい問題だと思います。例えば、去年の12月にクアラルンプールで行われた東アジア共同体についての会議の様子などを見ても、かなり悲観的な気持ちになったりするわけです。ですが、だからこそ「共生」と「融和」を目指して努力していかなければならないと強く思います。

岡崎　具体的に九州大学はどのような活動を通して、アジアにおける「共生」と「融和」に貢献していけるでしょうか。

大学の専門性を社会と共有

柳原　大学が持っている使命というのは、いろいろあると思いますが、もっとも大学が能力を発揮できるのは、研究と教育の場面です。教育の分野ではアジアの学生を積極的に受け入れ、また九州大学の学生をアジアの大学に派遣するという交換留学制度を押し進めていくことが大切でしょう。若い世代の人たちに、その感性が鋭敏で、思考が柔軟なうちに、お互いのことをもっともっと知り合い、学び合う機会を持ってほしいですね。研究の面では九州大学はすでに幅広い分野でアジアに関する研究が行われているわけですが、今後はそれらをさらに拡大、深化させていくことが必要だと思っています。加えて、そうした研究が、専門家の集まる学会や限られた大学関係者の輪の中で終結してしまうのではなく、有効・有意義な知識として、広く地域社会や産業界、また行政においても活用されるようにする必要があると思います。短く言えば、大学発の政策提言ということなのですが、それがまさにこのアジア総合政策センター（以下アジアセンター）に期待されている役割の一つですね。

緒方　確かにアメリカの大学などでは、その担うべき使命として教育と研究の他にアウトリーチというのを入れていますね。アウトリーチというのは大学の枠を越えて広く情報を発信し、大学の持つ専門性を社会と共有していくということです。柳原先生の言われる政策提言というのは、アウトリーチの一種として考えられるものだと思います。そう捉えると、大学が政策提言を行っていくということは、大学が担う機能であると思いますね。

ピニングトン　ただ従来の大学教員

は研究者として限られた専門分野の問題に深く取り組むように思考がトレーニングされています。一方、政策提言を行うためにはより広い知識と視野が必要です。ですから、アカデミズム（＝学術研究）の中で培われた深い知識を政策提言に活用するための工夫が必要です。さらに、そのような視点をどのように社会に知ってもらうかという問題があります。誰に対してどのように政策提言を行っていくのかという知識・情報の発信のしかたについてもよく考えていかなければと思います。

柳原　私が政策提言と言ったとき、ある固定観念をもって、こういうものが政策提言だから、その枠に当てはめてアジアセンターとして一定の提言を行わなければならないということを意味したのではなく、九州大学という大きな知の集積の中で、提供可能な知的情報を選択し、それを社会に向けて発信する作業の先導役をアジアセンターに務めてほしいと思って言っているわけです。ですから、学内で行われているアジア関連研究についてのいろいろな情報を集めて、個々の先生方の可能性をアジアセンターとしてバックアップしていくという体制をとっていくということが重要ではないかなと思います。

それからアジア重視戦略とか、あるいはアジア指向といった時に、九州大学はアジアのことしかやらないということなのかと誤解を受けることがあります。しかし、決してそうではありません。九州大学の国際戦略としては二つの柱を掲げており、一つはアジア戦略、もう一つは世界の大学との競争的協力関係を進めるということですから、アジアだけを相手にするというわけでは、決してありません。

↑香港大学での九大サマーコースの紹介

マルチラテラルな関係を目指して

緒方　実際、ヨーロッパやアメリカの大学は、アジア戦略というものをそれぞれ持っているわけです。そうすると、私たちが掲げるアジア重視路線というのは、日本とアジアという二者間の関係だけではなく、アメリカやヨーロッパの大学とアジアを対象として一緒に調査や研究をすることもありうるわけで、実際にそうした共同研究プロジェクトもあります。ですから、おのずとアジアを介してヨーロッパやアメリカとの多角的な関係は出てくると思います。

岡崎　アジアに出ていくことで、むしろそこから世界に広がっていくということですよね。

ピニングトン　その通りです。事実、私はヨーロッパやアメリカの大学で、特に歴史や考古学の分野で九州大学と関係のある研究者に多く出会っています。欧米のアジア研究者にとって日本にアジア研究の拠点やパートナーを持つことはとても重要なのです。ですからこのような協力関係は今後とも維持・強化されなければなりません。

岡崎　ここで、今一度、教育交流、研究交流のほうに話を戻したいと思います。アジアとの学生・学術交流をより深め

ていくにあたって、例えばこんなことをしたらいいのではないかというご意見を洪先生がお持ちと伺いましたが、ぜひ聞かせていただけないでしょうか。

人材の育成と交流

洪　東アジアという視点から考えますと、日中韓の間で、歴史的に長い期間にわたっての密接な交流関係があります。それでこの三カ国には、例えば祖先崇拝や仏教や儒教文化、また伝統芸術や民間芸能という分野でも多くの共通点が見受けられます。また、現在韓流ブームというのが起きていて、日本でも中国でも香港でも韓国のテレビドラマや映画が流行っていますね。私も今朝、ホテルで日本のテレビをつけたら、韓国のドラマをやっていました。アジアセンターにおいて、こうしたことを二つの問題意識として考察していくといいのではないかと思います。日中韓の三カ国で、互いに相手の国との共通点と相違点を認識し、理解し、そうする中で人材育成をしていくことが必要ではないかと思います。人と人の交流を強く進めていかなければならないと思います。

韓国、高麗大学校の校内

岡崎　先ほどアジア＝多様性、そしてアジアの混沌という話も出ましたが、ポップスやドラマ、またアニメなどに代表される若者文化、いわゆるポップカルチャーに関しては、民族・国境を越え、言語や文化や歴史の違いを障害とすることなく、アジアに一つの共通分母が形成されつつあるように見えますね。そうしたアジアの新しい共通項に注目して、今後のアジアの発展と変容を見つめていくということは、これまでの大学の研究ではあまり行われてこなかったと思うのですが、洪先生の仰るように、今後はぜひ積極的に取り組んでいきたい研究課題です。また、人と人の交流ですね。

柳原　九州大学ではアジア域内の学生交流を増加させることを目的にAsian Student Exchange Program（ASEP）[※2]という相互留学制度を提唱したり、アジアの大学との交流提携を増やしたりして、ここ何年かの間にずいぶんと交換留学生の数を増やしてきたと思います。それから学生交流ということで言うと、いま一つ考えているのは、ダブルディグリーの導入です。教員についても例えば、1学期間、九大の先生が海外の交流提携校に行って教え、反対に向こうから来てもらうという教員交流が

ベトナム、ハノイ市にあるルオン・ディン・クア通り

ベトナム、ハノイ農業大学で分子生物学技法を指導

できないかということも考えています。

アジアとつながる拠点としての大学

緒方　私も人と人の交流というのは本当に大切だと思います。これはハノイの農業大学に行った時のことですが、そこでルォン・ディン・クアという人の古い写真を見せられました。「ベトナムでは誰でもこの方を知っています。この方は九州大学の出身なんですよ」と紹介されました。あとで調べて分かったのですが、彼は終戦直後に九州大学を卒業して京都大学で学位を取り、独立戦争中にベトナムに戻って、困難な時期にいろいろな作物の新品種を作って自国の農業に貢献した人なんです。今ベトナムのサツマイモやスイカに彼の名前が付いていると伺っています。また、ヴォー・トン・スンさんという、非常に有名な農学者がいまして、マグサイサイ賞[※3]を受賞していますが、この方も九州大学で学位を取っています。今のベトナムからの留学生には彼らへの思いがあるのかもしれません。継続した人と人との交流というのは、やはり地道に続けていくべきだと思いますね。

岡崎　大学が国際社会に貢献できる大きな柱として、教育と研究における交流が指摘されましたけれども、今のお話は、まさに教育の分野で九州大学が大変にいい結果を残せた例ではないでしょうか。また、そうした立派な業績を残した留学生をアジアから受け入れている九州大学としては、九州大学で学んでいる日本人学生の皆さんにも、アジアについてもっともっと関心を持ち、アジアについて知り、アジアに出て行ってほしいと思います。学内におけるアジア関連の知的集積を外に向かって積極的に情報発信する役割をアジアセンターは担っているわけですが、同様にアジアセンターが学内の学生諸君にとってもアジアに開かれた一つの窓口になれたらいいなと思います。あのアジアセンターに行けばアジアが見える、アジアについてもっと知りたいからアジアセンターに行ってみようというような刺激的でかつ頼りになるアジアセンターにしていきたいと思っています。そのためには、先生方からのご協力も、ますます必要になると思います。どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。本日は、貴重なご意見をいろいろとお聞かせいただき、本当にありがとうございました。

※1　http://www.kyushu-u.ac.jp/president/president-room/greeting.html

※2　アジアの主要な大学との交換留学の促進及び単位互換をスムーズに行う制度の確立をめざして平成16年度より開始されたプログラム。原則として、派遣大学から渡航費が支給され、受入大学から滞在費（又は相当の援助）が支給される等、有利な条件で留学が可能。

※3　正式名称はラモン・マグサイサイ賞（Ramon Magsaysay Award）といい、フィリピン大統領ラモン・マグサイサイを記念して創設された賞。毎年アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を果たした個人や団体に対し、マニラ市のラモン・マグサイサイ賞財団より贈られ、「アジアのノーベル賞」とも呼ばれる。